

大平大全集 第六卷

岩波書店刊行

左千夫全集 第六卷

第六回配本(全九卷)

昭和五十二年五月十日 發行 ©

定價三五〇〇圓

著 者 伊 藤 左 千 夫

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 千 101 東京都千代田區一ツ橋千五
株式會社 岩 波 書 店

電話 〇三六五十四二一
振替 東京六三六三〇

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

歌話漫草	三
正岡先生三年忌歌會	二
『甲矢』消息	一七
竹乃里人選歌に就き	一六
諮問答案	二四
雜言錄一	三
『馬酔木』第十四號選歌評	三四
『馬酔木』第十四號消息	三五
上田秋成之歌上	三六
新佛教有て以來の文章	四
家庭小言	四
『馬酔木』第十五號歌會記事	三
萬葉集短歌私考 六一八	七

雜言錄二	八三
葯房主人「正述心緒歌五十一首」前文	八六
『馬醉木』第十五號消息	八七
『甲矢』選歌附言	八九
詩と運命觀	九一
竹の里人九	九五
新體詩に就きて	一〇〇
『馬醉木』第二卷第一號歌會消息	一〇二
『馬醉木』課題 初冬の消息	一〇五
『馬醉木』第二卷第一號選歌評	一〇七
『馬醉木』第二卷第一號選歌前文	一〇八
「某大學生記」附記	一〇九
『馬醉木』第二卷第一號消息	一一〇
新曲浦島所載の短歌	一二三
『馬醉木』第二卷第二號歌會記事	一二七
「諏訪行」に就て	一三三

『馬酔木』第二卷第二號選歌評	一三四
「まこもの一葉」附記	一二七
十九日會について	一二八
『馬酔木』第二卷第二號消息	一二九
歌譚抄	一三〇
十九日會記事	一四〇
『馬酔木』第二卷第三號歌會記事	一四三
『馬酔木』第二卷第三號選歌附記	一四五
山百合作新體詩「桃」評	一四六
新體詩に就て	一四八
『馬酔木』課題 床に關する記事	一五一
來世之有無	一五三
最も好める樹木に就て	一五四
雜言錄三	一五七
『馬酔木』第二卷第四號歌會記事	一六三
山百合作新體詩「遠人」評	一六五

『馬酔木』第二卷第四號消息	一六九
『甲矢』選歌附記	一七〇
竹の里歌之内	一七一
趣味と信仰	一七四
七月十九日會	一七六
沼津之歌會	一七九
二緒の玉	一八一
雜言錄四	一八四
玄女節	一八八
「新名につきて」附記	一八九
『馬酔木』第二卷第五號消息	一九〇
竹乃里人先生四週忌	一九一
修善寺行	一九三
雜言錄一片	一九五
我甥の病死	一九七
『馬酔木』第二卷第六號選歌評・附記	二〇〇

『馬酔木』第二卷第六號消息	101
「標野の夕映」附言	103
『馬酔木』第二卷第七號選歌評	104
『馬酔木』第二卷第七號歌會記事前文	105
『馬酔木』第二卷第七號新年號豫告	106
『馬酔木』第三卷第一號卷頭言	107
絶對的人格	108
長廣舌	114
『馬酔木』第三卷第一號選歌評	119
茶の湯の手帳	110
『馬酔木』第三卷第一號消息	111
『馬酔木』第三卷第二號卷頭言	113
御嶽乃歌會	114
年始の歌	116
『馬酔木』第三卷第二號歌會記事	117
『馬酔木』第三卷第二號選歌評	110

『馬酔木』杜陵短歌會選歌評	二五三
長塚節「課題選歌」附記	二五三
萬葉集新釋 九—十	二五四
『馬酔木』第三卷第二號消息	二六五
上田秋成之歌下	二六六
『馬酔木』第三卷第三號卷頭詞	二七〇
與謝野晶子の歌を評す	二七一
『馬酔木』第三卷第三號歌會記事	二八五
『馬酔木』第三卷第三號消息・稟告	二八八
「鹽耳彈琴集」附記	二九〇
『馬酔木』第三卷第四號選歌評	二九一
『馬酔木』第三卷第四號稟告	二九三
批評家の態度を論じて高島米峰に與ふ	二九四
反省の叫び	二九七
三井甲之「あやめ草」をよむ」附記	二九八
『馬酔木』第三卷第五號消息	二九九

『馬酔木』第三卷第五號會報・豫告	三〇二
青年の煩悶と詩趣	三〇三
吾崇拜する子規子	三一一
『馬酔木』第三卷第六號歌會記事	三二三
八面歌論	三二五
信仰と趣味	三二五
「峽乃秋霧」選歌評	三三二
「合歡木乃卷」選歌評	三三三
「九月乃歌卷」選歌評	三三四
「讀源氏物語」選歌評	三三六
「長塚節氏の文章炭焼のむすめにつき」附記	三七
桃澤茂春君の計報	三八
要 報	三九
『馬酔木』第三卷第七號卷頭詞	三四〇
『馬酔木』第三卷第七號歌會記事	三四一
「嗚呼我三度死す」附記	三四四

『馬酔木』第三卷第七號消息	三四五
一國の元氣を現顯せる歌ありや	三四六
不折山人と語る	三五〇
四壁小言一	三五五
『馬酔木』第四卷第一號消息	三五六
萬葉集新釋十一	三五七
「金刺信古の歌」附記	三六一
『馬酔木』第四卷第二號消息	三六二
『馬酔木』第四卷第二號稟告・正誤之謝辭	三六五
田安宗武の歌と僧良寛の歌	三六六
詩と社會との關係	三九一
『日本』選歌評	四〇〇
寫生文論	四〇一
三川遺稿短歌	四一二
子規と和歌	四一三
「募集課題空及水選歌」の後に	四一八

應募諸君に告ぐ	四一九
筭竹桃書屋談	四二一
盛世之詞章	四四九
四壁小言 二	四五三
「竹の里人先生六週忌」附記	四五五
「馬酔木」終刊之消息	四五七
『馬酔木』第四卷第三號稟告	四六一
御歌始の歌	四六二
『日本』選歌評	四六八
二葉亭氏の「平凡」	四六九
子規子	四七〇
『日本』選歌評	四七一
『日本』選歌評	四七二
『比牟呂』都波奈會乃歌選評	四七四
讀萬葉雜考	四七八
子規子の居常	四八三

『比牟呂』北山短歌會選歌評	四八六
『比牟呂』都波奈會歌選評	四九二
候	四九三
願くは先づ其私心を去れ	四九四
東都來信	四九七
『日本』選歌評	四九九
不透明式の文章	五〇一
伊藤左千夫大人談片	五〇三
新年物と文士	五〇八
注目すべき本年の作品	五〇九
碧梧桐氏に答へる	五一〇
信濃之人々	五二六
東京より	五二八
文士と酒、煙草	五三一
文士と芝居	五三二
正月の小説	五三三

目 次

文士とすし、汁粉	五二四
京都に門が四つある	五二五
「老獸醫」の批評に就て	五二六
退屈が堪へられぬ	五二七
春宵歌談	五三〇
小説の地の文の語尾	五三六
後 記	五三七

歌論・隨想二

歌話漫草

(一)

鶉川の諸君に暫く御無沙汰を致しました、別に仔細も何にもなく只譯なしに無沙汰したので有升、ところが今度俄に選者になつたり自作の歌を出したり歌話などを出したり、こう一度に五多々持込では、或は諸君の中でこれはをかしひ何か仔細があらうなど、妙な眼つきをする人があるかも知れぬ、それで言別を云ふ譯でもないが矢張仔細も何もない、華園が左千夫を持上げたのでもなく左千夫が馬酔木の殘稿を輸入したでもない、實のところ、馬酔木は經濟上の都合から紙數が制限されてあるので編輯を預る予が無遠慮に自分のものを掲げる譯にゆかぬ、それがためか、此頃腹の中へ聊か歌のグハスが溜つた苦痛を感じると云ふも饒山だが、少し咳拂でもやつたらと云ふ了簡で、早速華園許へ鶉川二三頁宛借してくれぬかと出掛けた次第である。

子規子が未だ存生の頃から、高等中學程度の少年間などでは、俳句は子規子であるが、歌は鐵幹であらうと言ふ様な考の人が多いとの噂を聞て、一寸をかしく思つたけれど、主動的の判斷に乏しひ少年時代には穴勝無理でもない、無論子規子の俳句などが、本統に解つて居るのではない、世評に雷同しての信向であるから、其鐵幹の歌